
魔法の小部屋

ニニカヤヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法の小部屋

【Nコード】

N7007S

【作者名】

ニニカヤヤ

【あらすじ】

王宮で女中をしている私の日課は、休憩時間に閲覧禁止の魔術書を読むこと。いけないとわかってはいるけどやめられない！
ところが、ひょんなことからある貴族に日課がバレた！！

毎日の日課

私は、魔術を使うことができる。

このことは、誰にも話したことはない。

この国では魔術を使う人間は大層貴重な存在で、それだけでも王宮召抱えの魔術師になったりするからである。つまりは、エリートになるということだ。正直、めんどくさいではないか。

王宮の魔術に関する蔵書が自由に読めるのは魅力的だが、宮廷の陰謀とかそういうのに巻き込まれたり、軍属して戦争に行くのも嫌だ。私は平和な日常を愛している。

魔術とは本来ディードリツヒ派とかそういう派閥があつて、そこに見込みのある者が弟子入りして教えを受け、魔術師を名乗るのが普通だ。そんな狭き門である魔術をどうして私のようなただの女中が使えるのかというと、私はかつて魔術の名門と言われたクレアドル派の宗家クラディール伯爵家の元令嬢だからだ。元、とつくのは両親が亡くなって、女ではもともと落ちぶれていた伯爵家を継ぐことができず、相続を放棄したためお家に取り潰しになったのだ。名門といえど昨今は魔術の適正を持つものも少なく、古い魔術形態を持っていた我が派閥は、弟子入りが途絶えてどんどん廃れていった。珍しいことでもない。

古い魔術はしきたりが多く、扱いが難しい。適正を持つ者が派閥としては新参のディードリツヒ派の門戸をたたくのは仕方のないことだ。

生活に困った私は、伝手を使って王宮の女中として雇ってもらった。元貴族の私だが、プライドはない。貴人とかにわがままを言われてもなんとも思わないし、侮られてもどこ吹く風というやつだ。

昔の知り合いに会ったって、完璧にスルーできる！

まあ、あちらは女中の顔なんて一々見ないだろうけど。

いろいろしがらみは多いが、王宮で働くにはわけがある。

今日も人目をしのんで王立図書館に入った私は、閲覧禁止の魔術書が置いてある部屋へ入ってゆく。本来封印されているので自由に入ることはできないのだが、こういうのはちょっとしたコツがあつて、ちよろまかす方法なんていくらでもある。

こつという小手先の魔術は、私の得意とするところだ。針の穴に糸を通すよりも繊細なコントロールで魔術を扱うことができる。これも、あの面倒なクレアドル派の魔術のおかげだ。

そうして中庭に面した窓際（外からは見えないように魔術がかかけられている）で魔術書を読むのが私の日課になっている。

見つかったらまずいとは思うのだが私の探究心はそんなことでは止められないのだ。

毎日の日課（２）

私は毎日のように日課をこなす。

そんなある日、私は魔術書に熱中するあまり休憩時間ぎりぎりまで読みふけてしまった。

（まずいな）

鬼のような形相を浮かべる女中頭の顔が思い浮かぶ。

あわてて閲覧禁止区域を出て出口へ向かう。

このとき、私は完全に注意を怠っていた。

このときのことは後で後悔しても後悔しきれないくらいだ。

どんっ

壁のような何かにぶつかり、しりもちをついた。壁、にしては・・・
やわらかい、ような・・・？

恐る恐る顔を上げる前に、その壁は私に声をかけてきた。

「大丈夫？」

差し出されたのは大きな手だ。騎士なのだろうか、剣ダコがある。

そして壁の頂点には、それはもう端正な顔が乗っかっていた。

（げ。）

思わずそんな顔をしてしまったのは仕方がないことだろう。この国の騎士には珍しく、鳶色の髪を短く切っている。そして、優しい色合いの珍しい紫の瞳。鼻は高いし、目は切れ長だし、すべてのパーツが完璧な姿で、完璧な位置に座している。

私はその顔に慄いたのだ。

「私の顔に何かについているのか？」

顔をまじまじと見られるなんてちよくちよくあるだろうに、白々し

くも言ってくるのがまた厭らしい。

よく見たら体も作り上げられたもので、均整が取れている。

「いえ、失礼いたしました。」

そういつて、差し出された手をとることなく立ち上がる。

差し出した手を無視されるなんて、あまりない経験なのだろう。ちよつと困つた顔をして、手を引つ込める姿も、けして情けなくなつていない。

白状すると、私は美形が嫌いだ。美形で、自分が美形であるとわかつている美形が嫌い。

美形で性格がいいやつなんて、絶対いないが私の心情だ。要するに、性格がひねくれているのだけだ。

「ここは図書館だ。次からは気をつけるように。」

そついつて笑顔で去つていく騎士に、冷や汗をかく。

（見られてないよね？）

私が閲覧禁止の部屋から出てきたところを。

見つかったら罰則どころの話ではない。閲覧禁止の書庫にいたなんて、絶対国家転覆をたくらむとか何とかで投獄される。

幸い、見られていないのだろう。騎士は去つたのだから。

そつ結論付けて、すっかり休憩時間を多くとってしまった私は、女中頭に怒られるべく仕事場に戻るのであつた。

日課の崩壊

やたら男前の騎士と図書館でぶつかってからしばらく、私は毎日の日課であった閲覧禁止区域に立ち入るのを我慢することにした。

念には念を、というやつだ。

それでも1日たち2日たち、と日を追うことに取り越し苦労のような気がしてきて、結局は3日間で私の自粛期間は終わった。もともと能天気な性分である。

あれから何の音沙汰もない。きっと大丈夫だろう。

4日目には騎士とぶつかってしまった事などすっかり忘れて、私は閲覧禁止の魔術書を読みふけていた。

『閲覧禁止』といわれると呪いとか危ない魔術を想像する人もいるだろうが、けしてそんなことはない。ただちよつと古い貴重な魔術とか難しめの魔術とかで、危ないものなんてほとんど置いていないでもまあ、呪術の原理とかも学べば面白いもので、ジャンルを問わず読み漁っているわけだが。

今日は古代の魔術儀式のついでの本を読んでいる。

新しい派閥の魔術と違って一つ一つ丁寧に、言ってしまうばかりくどく行く儀式も、その行為自体に意味がある。

簡略化されすぎて意味を失い、作業化しつつある現代の魔術にはないロマンが詰まっているのだ。

やっぱり、現代魔術は邪道だ。

簡易呪文も、儀式も、本来の姿と意味を知った上で行わなければいけないと思う！！

と、ついつい一人で語ってしまうぐらいに情熱を持っている。

それを外に発信する機会はないが、自己満足でも覚えていたい。

もともと私の派閥は建国当初からある古いものだから、こんなこだわりを持っているのだろう。

切りのいいところまで読み終え、休憩時間内に戻るべく図書館を後にする。

右よし、左よし。

今日は誰もいないようだ。

警戒しつつ、さっと扉を閉めて何事もなかったように歩き出す。このスリルもやめられない原因のひとつかもしれない。

「やあ。ここ最近はどうしたの？図書館に来なかったけど。」

無事に図書館を出て胸をなでおろしていると、不意に植え込みの花壇に腰掛けている人物に声をかけられた。忘れもしない、というか一度見たら早々忘れられない。あの無駄に男前の騎士だった。

全身に緊張が走る。

（ここ最近は来なかったって、私が毎日図書館に来ていたことを知っていた・・・？）

こんな男前が図書館をウロウロしていたら目立つと思うのだが、ぶつかったあの日以外に私はこの騎士の姿を見た覚えがない。どういうつもりでそんなことを言うてくるのか全く把握できないが、嫌な予感だけはひしひしと感じていた。

「先日は大変失礼をいたしました。申し訳ありません。しかし、私のような下々のものことなど騎士様がお知りになっても面白いことではありません。なにか気になる事でも御座いましたでしょうか？」

自分からべらべら話して凶星をつかれるのも嫌なので、「関係ないだろ、なんか文句あんのか」と大変丁寧に聞いた。相手はおそらく貴族なので、揉め事を起こすのは良くない。

「いつも図書館にいるのを見かけていたから、ここ数日来ないのが気になっていたんだ。単なる私の興味だが、気を悪くしたかな？」
緊張しすぎて一気に血が頭に上がっていたのが、今度はどつと下に降りて真っ青になるのを感じる。

見られていた？毎日??

いつ、どこで、どのタイミングで。

聞きたいが、そんなことを聞いたら「やましいことがあります」と言っているようなものだ。聞けない。

「いいえ。私のようなものがそのような大それたことを思うはずもゴザイマセン。たまたまでございます。タマタマ。」

焦りすぎて口調がおかしくなってしまうているが、正直私はそれどころではない。

（まずい、非常にまずい・・・）

私の名前もわからないだろうし、集団に入ってしまったえば私のような平凡な顔、きつと紛れてしまえるだろう。最悪、逃げるしかない。

そう結論づけた私は、不自然なほどの笑顔でハキハキと、

「申し訳御座いません！私、仕事が御座いますのでこれで失礼させていただきますー！」

叫んだ。

くるつと完璧な90度ターンを決めて私はいかにも忙しそうに歩き出す。

お願い、見逃して！！

そう祈りながら。

「そうか、仕事の邪魔して悪かったね。また明日、ミレアリア・クラディールさん」

しかし、男前の騎士は無情にも去り行く私の背中に殺傷能力抜群の言葉の爆弾を放り投げたのだった。

私は今、ミリアと名乗って女中をしている。しがたい庶民として。ミレアリア・クラディールは、私が貴族であった頃の名前だった・・・。

日課の崩壊（2）

騎士の追求から逃げ帰ってすぐ、私は女中仲間から情報収集をはじめた。

今後の身のふり方を決めるためだ。

しばらく図書館に行かなければ何とかなるのか、それとも今すぐ从这里逃げ出すべきか。そもそも閲覧禁止の書庫に入っていたことを見られていないなら、堂々としていれば何とかなるかもしれない。

明日は正直図書館に行きたくないが、逆に行かないと不審に思われてしまうだろうか。

どうしようどうしようどうしよう。

何をするにも、情報は大事だ。

まずは騎士の事を調べよう。

女中の情報網というのは美形、醜聞、恋愛において他の追随を許さない。

あんなわかりやすい美形、噂に上らないわけがないだろう。

そうして集めた情報曰く、あの騎士の名前はアルトリート・ブランシェ、ブランシェ侯爵家の次男。年齢26歳にして王太子殿下の近衛隊隊長を勤める超優良物件と言われていることがわかった。

何が優良なのかはわからないが、相当に才能のある人のような。人柄も優れており、誰に対しても穏やかで誠実な人柄だという。

男前で、貴族で、仕事ができ、誠実でって、神様の凡人に対する厭味なんじゃないだろうか。

しかし、問題はそこではない。

問題は、彼がデイドリヒ派に属する魔術師であるということだ。魔術師なら、もしかして私の使う開錠の術の気配を感知したかもしれない。

もちろん、そうそうばれるような魔術の使い方はしていないはずだ。痕跡も残さず、誰も魔術に気づかせないように、結界のほんの小さな矛盾を利用して侵入しているのだから。

騎士が何のつもりで声をかけてきたかは分からないが、おそらく閲覧禁止図書のことについてだろう。

こっちの素性がばれているのがまずい。どうやって調べたのだろう。

こうなってくると本当に国家転覆を企むとか何とかいって投獄されそうだ。

伯爵家の取り潰しを逆恨みして、城にもぐりこんだ私が、閲覧禁止図書から呪いの儀式を探し出して王家に復讐する痛快サイケティックホラーアクション、みたいな？

理由もしっかりしてるし、むしろ復讐したほうがいいんだろうか。つていやいや。別に復讐しても何もすつきりしないし、今の生活が気に入っていたのに。

でもそこまで疑われていたとすれば、ここから逃げ出しても追われるんじゃないだろうか。

考えれば考えるほどめんどくさくなってきた。

（今日中に荷造りでもして隣の国とかに逃げようかな）

追跡は魔術を使えばある程度かわせるだろう。

善は急げだ。

仕事中心だがもうすぐ終わるし、私がいなくなっても大丈夫だろう。同僚に「ちよつと具合が・・・」とかいって部屋に戻ろうと考えていると、女中頭に声をかけられた。

「ミリアさん。明日から異動です。あなたは所属が変わります」

「はい？」

「部屋も変わります。」

どういうことだろう。

このタイミングで異動というのはおかしいのではないだろうか。

「すでに迎えのものが来ていますから、今日はここまでにして部屋に戻って準備なさい。」

（に、逃げたい・・・）

このまま部屋に戻って逃げてしまおうか。

と、逃走経路をあれこれ考える。

女中頭の後ろに立っている騎士の存在については、考えないことにしたい。

「こちらが迎えに来てくださった、ハートネット殿です。」

女中頭の背を優に頭2〜3個分くらい超えている強面の騎士は、その鋭い眼光で私をにらみつけ無言で私に会釈した。その眼光だけで、か弱い私の希望は粉々に砕け散った。こんなから逃げるとか無理だ。精神が持たない。

お、終わった・・・

そうして従順な私は荷物をまとめたのだった。

日課の崩壊（3）

騎士に付き従い、従順な私が連れてこられたのは王宮からすぐの貴族たちの邸宅が建ち並ぶ区画だった。

てつきり投獄されると思っていた私は拍子抜けだ。

いくら王宮からすぐ隣の区画だからといって、こちらは荷物があるのだから馬車でも使えばいいのに、徒歩でレンガ敷きの道を進む。

強面の騎士は、か弱い乙女が重い荷物を持っているというのに、それが気になっていないようだった。

あんな巨人のような騎士と小柄な私では歩幅が違うので、私はついていくのに必死である。

悔しいからここで逃げ出してしまうかとも考えたが、こんな顔で巨体で後ろから猛ダツシュで追いかけられたらと思うと生きた心地がしないので素直に後についていく。

どのように恐ろしいかというと、まず大きいのが怖い。

私の頭2〜3個分を優に超える身長をもち、腕などは私の腕3本分くらいあるのではないだろうか。

そして、この顔。

短く刈り込んだ真っ黒な髪に、がっしりとした顔のパーツ。

目は一見髪と同じ黒に見えるが、良く見ると夜の木々を思わせる深い緑色だ。眼光は鋭く、ひと睨みで私の体に大きな穴を開けてしまいそうだ。

日に焼けた肌にはところどころ古傷があり、いかにもな雰囲気漂わせている。

魔術で何とかしようにも、びくともしないだろう。

この見た目に完全に心折れた私には、大した術は使えない。

魔術というのは、想像の力。心で負け、逃げ切れる考えすら持てな

「私はただの17歳の小娘なのだ。」

「もともと攻撃型の魔術は得意ではないから、ありったけの魔力を叩きつけたところであたき返されそうではあるが。」

「腕の一振りで吹っ飛ばす私がありありと想像できる。」

「（だめだこりゃ。）」

「想像力が豊かというのも、考え物であるかもしれない。」

「ほどなくしてとある邸宅の前で立ち止まった騎士は、こちらを窺うそぶりを見せた。」

「……。」

「……？」

「怪訝な顔をする私に何故か無言で頷いて、邸宅に足を踏み入れる。目的地に着いたということなのだろう。」

「屋敷の門番もその強面でスループスし、ずんずんと歩を進める。」

「「すいません、お邪魔しますっ」」

「何故か私が後ろから謝罪をしてついでいく。」

「いいおじさんにもこの騎士の顔は怖いのだろう。明らかに門番の顔も引きつっている。」

「屋敷内との人間とは顔見知りのようで、みんな引きつった表情をするけれども、不審者扱いをしていない。」

「……。」

「相変わらず無口な騎士は、屋敷の人間を蹴散らすような勢いで（私にはそう見えた）屋敷内の一室に私を案内した。」

「（怖いよね、そうだよ。私も怖いよ……）」

「これから先のことはもちろん怖いが、さしあたって今はとにかくこの騎士が怖い。」

「ノックをして騎士が先に入っていくので、私も恐る恐る扉の中に入った。」

「やあ、今日ぶり。」

私は、緊張のあまり強く握り締めていた荷物が落ちる音を遠くで聞いた。

驚きで開いた口がふさがらない。

大量の書類に囲まれながら厭味なくらいさわやかに挨拶してきたのは、図書館で会ったあの男前の騎士。
アルトリード・ブランシェその人だった。

人生の転機

「急な呼び出しで悪かったね。驚いたろう？本当は明日でも良かったんだけど、善は急げって言うじゃないか。」

書類に埋もれそうな机に優雅に座っている男前の騎士ことアルトリート・ブランシュは、まるで春のそよ風のような爽やかさでのたまった。

確かに私も善は急げと言ったが、ひとつはつきりさせておこう。これは善じゃない。少なくとも、私にとっては。

そんな私の気持ちなどお構いなしに、アルトリートは

「また会えて嬉しいよ、ミレアリア嬢。」

などと恋人との再会を喜ぶような口ぶりである。

「・・・はあ。」

私の開けっ放しの口は、びっくりするほど間の抜けた返事しかすることができない。

「キャラルもご苦労だったね。」

ああ、流し目も絵になりますね。ていうか、この巨人さんキャラルっていう名前だったんだ。どうでもいいけど、似合っていないな。

私の思考停止状態の頭では、もはやそんな感想しか浮かばない。

「・・・。」

強面の騎士は、どことなく誇らしげに胸を張った。ような気がした。なにせ騎士の盛り上がる胸筋はこれ以上ないくらいに盛り上がっているし、何故か姿勢がやたらと良いので下から見上げる私には良く分からなかったのだ。

ただ、口元はわずかだが綻んでいる。上司に誉められて喜ぶなんて、まるで犬みたいだ。

見かけによらず可愛い人なのかもしれない。

ただ、この顔で照れ笑いかすつごい破壊力だけど。そのままの意

味で。

そんなことを考えていたおかげか、私は冷静さを取り戻した。自分の置かれている状況を把握しなければ。

「ブランシュ殿、こによ度はどのようなご用件で私をお呼びいたただいたのでしょうか。」

冷静になったなんて勘違いだった。

緊張で嚙んでしまった。顔から火が出るほど恥ずかしい。

しかも何故か言い直したのだが、それがまたなんとも痛々しい気がする。

こちらがこんなに恥ずかしい思いをしているというのに、そのことに関してはこの男前はちつとも反応を示さなかった。

逆に恥ずかしいです。ぷつとかクスリとかしてくれればいいのに。

「・・・フツ。」

すこし遅れて聞こえた息遣いは、信じられないことに隣の強面の騎士からだった。

あの顔が笑いをこらえているところを見てみたいような気がするが、心臓に悪そうなのでやめておこう。私の判断は正しいはずだ。

「ああ、女中頭から聞いていないのかい？」

長い沈黙をはさんで、男前は何事もなかったかの様に完璧な笑顔で返してくれた。

あれをなかったことにするとかものすごくいい人か性格が悪いかの二択だ。

間違いなく、後者であると思うが。

「私はね、君をスカウトしたんだよ。これから君の肩書きは近衛兵付顧問魔術師だ。仕事内容としては私の副官のような立場になる。」

その完璧な顔よりもその顔の隣の書類の山にしか目がいかない私は、間髪いれずに「お断りします。」と答えた。

正直何も考えてなどいなかったとは後日談だ。ただ嫌だった、それに尽きる。

「図書館の隣にある建物に私の執務室があるんだが、そこから何が
見えると思う？」

図書館の隣は騎士棟になっている。だから彼の執務室がそこにある
というのは理解できるが、何を言わんとしているのかは理解できな
い。

「あの部屋の扉や窓の結界の術、私がかけたものなんだ。」
理解力のない私に、男前の騎士はもうひとつヒントをくれた。

「外から窓が見えなくなる結界、私には丸見えなんだよね。」
「近衛兵付顧問魔術師のお話、謹んで受けさせていただきます。」

全部ばれていたらしい。

最後まで言わせてはいけないような気がして、私は男前の言葉尻に
被せるようにして承諾の意を伝えた。人生、引き時が肝心だと思う。

魔術師のお仕事

私が近衛兵付顧問魔術師なんて仰々しい肩書きを得てから一週間が過ぎた。

当初はどのような過酷な仕事をさせられるのか戦々恐々としていた私だが、就任初日にしてブランチ隊長が担当していた結界を問答無用にすべて引き継がされたことから考えても、『未経験者でも大歓迎！先輩が優しく教えます。定時に帰れる簡単なお仕事』とかそういう職場でないことは確かだ。

デイドリツヒ派に所属する魔術師にしてみれば結界の張りなおしくらい簡単にできることだが、古い魔術形態を持つクレアドル派の私にとっては大変な大仕事だった。

そもそも、現代魔術と古代魔術は魔術の展開方法において大きく異なった特徴を持っている。

例えば、結界を張るにしても現代魔術では自分の魔力を使い術を起動・維持しなければならないが、その代わり呪文ひとつで発動できる簡易なものだ。発動に必要なだけの魔力を使い、維持に必要なだけの魔力を注げばいい。

しかし、古代魔術は発動においては自分の魔力を使用するが、維持するためには魔力を必要としない。説明が難しいのだが、簡単に言えば自然界における力場を利用して結界を循環する魔術回路を練り上げるため、展開に時間がかかるし力場を作り変えるための大きな魔力も必要とする。

更に言うなら、その魔術回路についても結界を張る大きさ・場所・力場の特性や性状によって設計図が必要になる。より精密に作り上げた回路はより強固な結界となるが、デザインを誤ったり精密な回路が練れなければ結界として機能すらないという面倒な代物なの

だ。

王宮に結界を張るには維持費を必要としない便利な魔術だが、戦闘などには全くの不向きであるし、習得の困難さもあって古代魔術を主流とするクレアドル派は廃れてしまったというわけだ。

私はこの一週間のほとんどを結界の再構築に費やした。あの悪魔のような男前の騎士ブランシュ隊長が急かしやがるので（つい言葉が汚くなってしまった）三日間徹夜で設計図を作り、久しぶりの睡眠もそこそこに王族の私室や後宮にいたる場所に結界を張り続けた。今の私の残機は0だ。

「ご苦労。ゆっくり休めといたいたところだが、宮廷で魔術師として働くためには登録が必要だ。後回しになったが今から行くぞ。」

今にも気絶しそудだというのに、この鬼畜は休ませてくれる気がないようだ。

初対面からこいつ性格悪いと気がついてはいたが、もうそんなレベルではない。

私が部下になったことでその化けの皮はつるりときれいに剥けてしまったらしい。

「ちょ……。疲労のあまり膝が笑うを通り越して体の節々が大爆笑なんですけど、そんな部下をいたわる気持ちはないんですか……。」

振り絞るように出した抗議の声も、かの大魔王には風が吹く音くらいにしか聞こえていないようだった。無視して私を引きずっていく。「そもそも登録時に魔力量とか性質を測るのに、こんな枯渴した状態じゃ登録できませんよ……。」

「無駄口をたたく元気があるなら問題ない。登録が済ませたら休ませてやる。」

不敵に嗤うその顔は、今まで見たどんな顔よりアルトリート・ブランシュという人にぴったりだと思った。

魔術師のお仕事（２）

悪魔だ。

あの美貌の下には醜悪な悪魔の顔があるに違いない。

結局、あの後私は魔術師として登録されるべく魔術管理局という宮廷魔術師を雇用する機関へ連れて行かれた。

この魔術管理局というのは国内の魔術師のすべてを取り仕切っており、魔術師の保護から育成、権利保障まで一手に引き受ける公的施設だ。

この魔術管理局に登録すれば、魔術師に関して行われるこの国の保障すべてを受けることができる。もちろん、家がお取り壊しになって身元がいまひとつしつかりしていない私の身分を証明してくれるので、王宮で魔術師として働くには必須なことだ。

「ではこちらにお名前といくつかの項目を書き込んでください。」
ペンを持つ力も入らないわが身に鞭打ち、なんとか羊皮紙を埋めていく。

貴族だった頃の名前を書いてもしょうがないので、ただミリアとだけ記載する。

派閥は悩んだのだが、隊長の許可がおりたのでデイドリヒ派にしておいた。なんとなく、ここにクレアドル派と書いたら騒がれる気がしたからだ。

きつと古代魔術なんて絶滅宣言されてるだろうから。自意識過剰かもしれないが。

「こちらにある魔水晶に手をかざしてください。」
書類を書き終えると、人の頭部くらいの大きさのガラス玉がおかれ

た。

この魔水晶は一見何の変哲もないガラス玉に見えるが、魔術師が手をかざせば魔力量に応じて光が増し、性質に応じて色が変わる。一般人は魔術師のように魔力が循環していないので、手をかざしても魔水晶が反応する事はない。

魔水晶での測定は初めてだが、この魔力も体力も絞りつくされた状態でちゃんと反応するのか甚だ疑問だ。

案の定、手をかざしてもわずかばかりの光しか灯らなかったわけだが。

だが、受付のお嬢さんは少し驚いたような顔をしていた。

まあ、こんな魔力量で魔術師登録とかちゃんちゃらおかしくて鼻で笑ってしまうのだろうか。

魔水晶に灯る光の色によって魔力の性質が分かるのだが、今の私の残りカスのような魔力では何色かも判別できない。

「ほう、面白いな。」

受付のお嬢さんが奥に引込んだところでそれまで浮かべていた爽やかな笑顔は不敵な笑みに取って代わった。さすが、切り替えが早くていらつしやる。

「何も面白くないですよー・・・もう戻って休んでいいですか？」

ここ一週間で私の隊長に対する態度が随分ぞんざいになったが、高貴な方であるはずのこの悪魔はあまり気にしていないようだ。最も、この一週間に強いられたことを思えばお釣りがくるぐらいだと思うが。

「ああ、かまわん。夕方には近衛隊のやつらに顔通しがあるから起きて訓練場に来い。」

あんたは鬼だ！悪魔だ！！大魔王だ・・・！！

「夕方って・・・もう一刻半もないじゃないですか。顔通しなんて明日の朝でも・・・」

絶望に打ちひしがれながらも命の危機を感じて抵抗するが、大魔王ブランシュ閣下には下々の訴えなんて聞く道理もないようだ。

「明日の朝からは王室警備通常営業だ。覚えてもらいたいことは山ほどあるんだから、のんびりさせるわけにもいかん。本来なら投獄か死刑になるところを、俺が人材の有効活用してやってるんだからキリキリ働け。」

どうやら私には魔術管理局の保障は無効のようだ。

「顔通しが終わったら明日の朝までは休ませてやる。感謝しろ。」

この時ほど、スリルがたまらないとか思ってた過去の私を殴り倒してやりたいと思ったことはない・・・

閑話：隊長と私

夕方にもた起きなくてはいけないことを考えれば、眠れるはずもなかった。

部屋に着いて崩れ落ちるようにベッドに倒れこんだ私は、相当疲れていたらしい。

とてつもない睡魔に襲われた。もういつそのこと、『夕刻までには』といわれた言葉を無視して寝過ごしてしまえと思ったが、あの悪魔が恐ろしいので必死に睡魔に耐える。体は鉛のように重いし、瞼は縫い付けられているのではないかというほど開きにくい。

（寝たら絶対起きないだろうな。）

このままベッドに倒れこんでいても寝てしまっただけだ。

この部屋に引越してきてから荷物を整理する暇もなく働いていたので、まだ鞆に詰め込んだままの替えの下着を引っ張り出す。ここ一週間はまともにお風呂すら入れず、簡単に体を拭いただけだったのできつと乙女にあるまじき体臭をしているだろう。魔術師の制服はまだ仕立てが終わっていないとかで女中服のままだが、顔通しの前に臭いだけは何とかしなくてはと騎士棟にある浴室に向かった。

しかし、大浴場の前まで来て私は大変なことに気がついてしまった。というか、今まで気がつかなかったほうがおかしい。この男所帯の騎士棟に女性用の浴室なんてあるはずもない。

「どうしよう……。」

浴場の前で立ち尽くしていると、「ミリア？」と声をかけられた。

「隊長？隊長もお風呂ですか？」

いつもはきつちりと着込んでいる軍服の上着を脱いでいる。よく考えれば、私に強制的の仕事をさせている間、見張りのようにすぐそばですっと仕事をしていたのだから、私と同じでろくに休んでいな

かったに違いない。それでこんなにピンピンしているのが信じられないくらいだ。結界にしたって、担当してから半年がたつという。あの範囲をずっと維持できるなんて、魔力的にも精神的にも化け物だ。

そんなことを考えながらまじまじと隊長の小奇麗な顔を見ると、ニヤリという言葉がぴったりの笑顔を浮かべた。

「まさか、一緒に入るつもりじゃないだろうな。」

「……。」

私が思わず嫌そうな顔をしてしまったのは仕方がないと思う。

「おい、そんな顔するのはお前だけだぞ。失礼な。」

どんな自信家だ。鼻で笑ってやると、納得がいかないといったような顔で顔をしかめてしまう。しかめても絵になるのだが、あいにく私にはかつこいいとか美しいとかそういったものに関する心の機微に欠けるらしい。

「お風呂には入りたいんですが、さすがに狼の群れに子羊のような私が入ったら危険ですからね。部屋で清拭することにします。」

至極当然なことを言っただけなのに、今度は私が鼻で笑われてしまった。

「お前の起伏の少ない体を見ても、誰も奮わん。安心しろ。」

「なっ……。上司という立場を利用してそういう性的な嫌がらせを部下にするのは、如何なものと思います。」

胸なんて重そうだし、動きにくそうだし、何にもいいことなんてないのに。私の起伏の少ない体も、これはこれで良いと思っっている。

「まあ何かあっても困るから、今後は隣の浴室を使い。お前専用にしてやった。」

なんという卒のない男なのだろう。ここまで気がつくことができるなら、私にもっと休養をくれてもいいようなものだが。

「隊長、今まで鬼とか悪魔とか思ってたすいませんでした。ありがとうございます。」

お礼を言っただけなのに、何が気に食わないのか隊長は何故か私の

頭を軽く小突いて大浴場に入ってしまった。

「ちゃんと鍵を掛けて入れよ。間違って入ったやつがかawaiiそうだからな。」

失礼な。

以前はお偉いさん専用だったのだろう。私に宛がわれた浴室は、小さいといっても十分に足を伸ばせるほどだ。

隊長殿には感謝である。

閑話2：紳士たちの社交場

寝てないことによつて逆に目がギンギンと冴え渡つてしまった私は、定刻の少し前に訓練場へ到着した。

ほのかに香る程度だった汗の香りは、近づくにつれて芳醇な香りになつていく。

要するに、すっぱい。

「こんなにこの近くに來たのはじめてかも。」

女中時代は近寄ることがなかったので、強烈な汗臭さというか、男臭さにくらくらしてしまう。

近づいただけでこれなのだから、中はどんな異臭に満ち溢れているのだろうか。想像するだけでも恐ろしい。

近衛騎士というからには家柄もよく眉目秀麗、実力も兼ね揃えた超人集団なのだろうが、滴り落ちる汗の匂いは常人並らしい。

そもそも女中仲間とは仕事の話しかたがないので、近衛兵のことなんてほとんど知らない。

ただこの国の近衛騎士団は2つあって、アルトリートが属する騎士団は実力主義の黒翼騎士団であること、もう一翼の白翼騎士団長はラシード・リユーンといって侯爵家の次男坊が勤めていること、そのくらいしか知らない。

意を決して訓練場の門をくぐる。

ふと汗のにおいに混じつて嗅ぎ覚えのある匂いが鼻を刺激する。

「ん？」

この匂いは・・・

「いらつしゃーーーーい!!」

おいに氣をとられていた私の視界に飛び込んできたのは、その筋肉を惜しげもなくさらし、半裸で酒盛りをしているごつい男たちだった。

場所を間違えたんだ。そうに違いない。

仮にも近衛騎士団、こんな脳みそまで筋肉でできていそうな男たちであるはずがない。

そう思っただけで即座に回れ右した私は、すぐに壁にぶつかってしりもちをついてしまう。

「でじゃぶ？」

思わずそんなことをつぶやきながら恐る恐る顔を上げようとする私に、壁が話しかけてきた。

「大丈夫？」

差し出されたのは大きな手。騎士なのだろうか、剣ダコがある。

そして壁の頂点には、それはもう端正な顔が乗っかっているのだろう。私は知っている。

（前にも同じようなことがあったな・・・）

「大丈夫じゃないです。部屋に帰って休めますね。」

こんな汗と酒と男臭さが一体化した空間には立ち入ることができない。

乙女として何か大切なものを失ってしまう。

私は差し出された手は借りずに立ち上がり、そそくさと隊長の横を通り抜ける。

ッガン！

「まあゆっくりしていけよ、ミレリア嬢」

物音に驚いて立ち止まった私の目の前には、黒い騎士団の制服と隊長のそれはもう美しい顔。通せんぼとは年甲斐がないです、ははは。神様に余すことなく愛されたその顔は近くで見るとすさまじい迫力で、私は恐ろしさのあまり抵抗をやめておとなしく酒池肉林（とはいつでも男だが）の中に入ってしまったのだった。

その日、新人歓迎会という名馬鹿騒ぎは夜遅くまで続いたが、何かシヨックなことがあったのだろう、私の記憶はほとんど残っていなかった。

黒翼の騎士たち（１）

自分で言うのもなんだが、私はとても勤勉な人間だと思う。

でも肉体には限界というものがあるわけで・・・

と、言い訳をしつつ二度寝を決め込もうとした私だったが、あまりにも存在感のありすぎる『それ』を無視することなんかできなかった。

苦勞してベッドから半身を起こしぼさぼさの髪の毛を何とか撫で付けて、わたしはそれに話しかけた。

「なんで私の部屋にいるんですか、ハートネットさん。」

強面の騎士が私の部屋の入り口に仁王立ちをして、こちらを眺めている。

どうやって鍵を開けたとか、プライバシーはないのかとかいろいろ突っ込みたいことはあるのだが、とりあえずこの状況は嫁入り前の娘として拙いのではないのだろうかと言いたい。

誰も聞いてくれなくても、それだけは主張したい。

私はもう貴族ではないし、結婚がしたいわけでもないから特になにか拙いということはないかも知れないけど。

「・・・。」

一応気を使っているつもりらしい。

部屋のドアは全開で、密室にならないようにしてくれているようだ。部屋の入り口に仁王立ちしているのも、部屋には立ち入らないようにしてくれているのだろう。

しぶしぶ起き上がると、わずかに頷いて部屋の扉を閉めてくれた。

ドアノブを見ると、黒翼騎士団の制服と思しき黒衣が掛けられている。

これに着替えて来いという意味なのだろう。

女性が騎士団に入ったなんて聞いたことがないから、制服はきつと男物だろうと思っていたら、意外にも女性らしいラインで作られていて赤いリボンまでついていた。

しつかりとした黒地の生地、左腕の部分には魔術師であることを表す金色のラインが3本入っている。

1本は見習い、2本は下級、3本は中級、4本は上級魔術師を意味しており、我らが隊長はもちろん4本線。魔術師人口の少ない昨今では、3本線でも十分破格の待遇だ。

採寸もしていないのにぴったりの制服に首を傾げつつも、しぶしぶ部屋を出る。

「お待たせいたしました、ハートネットさん。」

私が声をかけると、満足そうにうなづいて歩き出す。

初対面からそうだが、この人は声が出ないのだろうかとか心配になるくらいしゃべらない。

どうやら気を許した人間には話もするようで、私とはまだその関係にないのだろう。私もおしゃべり好きではないから、沈黙が苦痛にならないこの空気は好ましい。ただし、どうしたって彼の顔は怖いのだが。

「ようー！キヤロ、ミリアちゃん」

陽気な声に振り返ると、ブルネットの背の高い騎士がへらへらと笑いながら手を振っていた。

「エド先輩、おはよう御座います」

性格も頭の中身も軽そうなこの先輩は、昨日の酒池肉林で知り合った黒翼の騎士で、何とかという三流貴族の三男だと言っていた。正直、あまりよく覚えていない。

そもそも実力主義の黒翼では、家名や爵位はあまり意味を成さないようで、みんな愛称で呼んでいる。何十人もいる騎士団の家名や何やらを覚えるのは結構めんどくさいのでありがたい話だ。私の場合、女性ということもあって公式の場にはほとんど出なくていいそうなので、名前を覚えるのは当分後回しでよさそうだ。

「制服すごく似合ってるよ。かわいいなあ」

「ありがとうございます。」

言われなれないことに少し赤くなってしまつと、エド先輩はそれを横目でニヤニヤ見てくる。

このどうしようにもない先輩は、こうして生娘をからかって反応を楽しむのが好きらしい。昨日も散々からかわれてしまった。

「からかわないくださいよ。恥ずかしいんですから」

ちよつとむつとしていると、さらに嬉しそうに「照れてるの？かわいいなあ」といつてくる。

本当に反応に困る先輩だ。

詰め所につくまで散々からかわれた私が朝からぐったりとしてしまったのは、仕方のないことだと思う。

黒翼の騎士たち（２）

近衛騎士というのは国王直属の部隊であり、戦時には王の両翼となり国を守護する。しかし、今は大きな戦もなく、小競り合いすらない。

平時は公の場で王族に侍り守護すると思われがちだが、普段からパレードや大きな式典のように王族を守っていたら仰々しくてかなわないと必要最低限の騎士しか警護に回らないのだ。残った騎士たちは、もちろん有事に備えて訓練をしている。私は魔術師だから、訓練というよりは魔術の研究になるんだろ？と勝手に思っていたが、そうなるはずもなかった。

「とりあえずこいつらと一緒に走って来い。今日の訓練はお前に合わせてそれだけだ。」

走るだけ。

簡単に聞こえた人はいるだろうか。

自慢ではないが、例に漏れず魔術師の私が体力馬鹿なんてあるはずもない。

階段を上っただけで息が切れるお年頃だ。

が、この人にそれを言っただけでどうなるんだろう。「だからどうかしたか？」とそれだけで終わるのは目に見えている。それどころか、もっとつらくなるかもしれない。

ここ何日かの付き合いではあるが、この顔のやたらといい騎士は鬼畜であると断言できる。

「・・・わかりました。」

下唇を噛みつつむいてしまうと、他の騎士たちも同情的な視線を向

けてくる。

「では訓練場に向かえ。」

「何週走ればいいんですか？」

私は、このときこの人の恐ろしさをあまり考えていなかったと思う。こんなことを聞くなんてばかげていた。

「・・・？」

心底不思議そうにこちらを見てくるその顔。何でそんな顔をするの？え、なんか変なことを言った？

「・・・？」

こちらもつられて首を傾げていると、なぜか合点がいったように頷いて天使のような微笑を見せてくださった。

「今から昼の休憩時間までと、昼から夕の鐘がなるまで足を止めずに走れるだけ走り続ければいい。歩いてはいけない、走るんだ。」

いとも容易そうな口ぶりだった。実際この人にとっては容易いかもしれない。

でも、正真正銘の乙女にはきついと思います。

「・・・はい。」

がつくり頭をたれる私を、心優しい先輩方は引きずるようにして訓練場まで連れて行ってくださったのでした。

「まあ、洗礼みたいなもんだから。一緒にがんばろうぜ。」

そついつてライー先輩は慰めてくれた。近衛にあるまじき無精ひげを生やしたその人は、3児の父だという。平民の出だが、入り婿で男爵位をもらっているらしい。

すごくいい人だがいたずら好きで、その顔には『他人の不幸で飯がうまい』とでかでかと書かれている。誰に見えなくても私には見えた。

お父さん、お母さん。ここは鬼畜たちの巣窟です。

もしかしたら、近日中にそっちに行くことになるかもしれません・・。

ちなみに、この日私が吐くまで走って気を失ったのはいうまでもない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7007s/>

魔法の小部屋

2011年7月22日12時42分発行